

公益信託商船三井モーリシャス自然環境回復保全・国際協力基金 支援プロジェクト

「WAKASHIO 座礁事故による油流出がモーリシャス島の
水鳥に及ぼす中・長期的な影響の評価」

2025 年度 最終報告書

一般社団法人バードライフ・インターナショナル東京

2026 年 5 月 15 日

1. プロジェクトの背景と目的

2020 年 7 月に発生した WAKASHIO 号座礁事故により、モーリシャス沿岸へ重油が流出した。本プロジェクトでは、事故が水鳥および沿岸生態系へ与える中・長期的影響を評価するとともに、現地におけるモニタリング体制の構築、生物多様性保全提言の作成を目的として活動を実施した。

【5 年間の活動目的】

- (1) 5 年間にわたる水鳥のモニタリング調査
- (2) 現地スタッフのモニタリング能力向上のための研修
- (3) モーリシャスの生物多様性保全戦略の策定

2. 2025 年度の活動

2.1. 水鳥モニタリング

汚染地域 4 地点、非汚染地域 4 地点において、2025 年 10 月～2026 年 3 月に月 1 回モニタリングを実施した。



図 1. 調査地点（A は汚染地域内、C は非汚染地域内）

表 1. 調査地点

汚染地域		非汚染地域	
A1	Rivière des Creoles public beach	C3	Anse La Raie Beach
A2	Rivière Champagne	C4	Le Morne Beach
A3	Bois des Amourettes	C6	Petite Rivière Noir
A4	Anse Jonchée	C7	Grand Gaube

2.1.1 調査結果

2025 年度も、汚染地域 4 地点および非汚染地域 4 地点において、2025 年 10 月から 2026 年 3 月まで毎月 1 回のモニタリングを実施した（Appendix 表 2.月別確認数推移参照）。

調査では、合計 30 種 1,938 個体の鳥類を確認し、そのうち水鳥は 17 種 1,131 個体であった。調査の結果、2023 年度・2024 年度と同様に、汚染地域と非汚染地域の間で水鳥の種数・確認数に明確な差異は確認されなかった。

一方で、一部調査地点では道路工事やイベント開催による騒音、人の往来等の人為的攪乱が確認され、水鳥の一時的な忌避行動に影響した可能性が示唆された。また、海岸部において野良犬による水鳥への追跡・威嚇行動が観察され、採餌・休息環境への影響が懸念された（Appendix 表 3.観察状況参照）。

現時点では重油汚染による顕著な影響は確認されていないものの、底生生物への影響や個体群構造の変化等については、引き続き中・長期的なモニタリングが必要である。

① 重油汚染の影響

汚染地域 4 地点および非汚染地域 4 地点において、23 種（陸鳥 7 種、水鳥 16 種）の確認数を記録した（Appendix 表 4. 汚染地点・非汚染地点比較参照）。2023 年・2024 年と同様に、非汚染地域の確認数が汚染地域を上回った。一部調査地点では道路工事や行事等による騒音が確認されており、人為的攪乱が水鳥の確認数に影響した可能性が示唆された。重油汚染の影響を適切に評価するため、今後も継続的にモニタリングを実施し、経年変化の分析を進めていく。

② 経年変化

2020 年調査と共通する 6 地点において、水鳥の経年変化を確認した（Appendix 表 5. 観察された鳥類の経年変化参照）。すべての調査期間を通じて水鳥は継続的に確認されており、特定地点からの消失傾向は認められなかった。一方、2025 年度は調査期間や時間帯が限定されていたことから、確認数は相対的に少なくなった。観察数が少なく年変動が大きいため、個体群構造への潜在的影響については、引き続き慎重な検証が必要である。

③ 採餌調査

シギ・チドリ類等の水鳥について、採餌行動調査を実施した。ビデオカメラを用いて一定時間個体を観察し、採餌回数や餌生物の種類等を記録した（Appendix 表 6. 観察された採餌回数参照）。

2025 年度調査では、汚染地域において採餌回数が著しく低下する傾向は確認されなかった。一方で、海岸部ではチュウシャクシギが人間の食べ残しを採食する様子が観察され、人間活動による餌資源の変化が水鳥の行動に影響を与えている可能性が示唆された。

また、食べ残しに誘引されたカラスによる威嚇・攻撃行動も確認され、水鳥への新たな生

態学的圧力となっている可能性がある。今後は採餌行動調査時間を統一し、単位時間当たりの採餌回数を比較することで、より精緻な比較分析を行う予定である。



図 2.海岸の食べ残しを食べる様子



図 3.採餌の様子

2.2 普及啓発活動

市民参加型の環境保全活動として、2025 年 10 月 11 日の「世界渡り鳥の日（World Migratory Bird Day）」に、ル・モーン海岸においてバードウォッチングを開催し、12 名が参加した。MWF スタッフによる解説のもと、参加者は水鳥観察や種識別を体験し、モーリシャスの自然環境や渡り鳥保全への理解を深めた。本活動を通じ、市民科学を活用した環境保全意識向上の有効性が確認された。



図 4.バードウォッチングの様子

2.3 モーリシャスの生物多様性保全の提言

2.3.1 優先的に取組む地域の特定

モーリシャス共和国には 17 の主要生物多様性地域（Key Biodiversity Areas：KBA）が存在する(Appendix 表 7. モーリシャス共和国の KBA 参照)。本年度は、限られた保全資源

を効果的に活用するため、生物多様性価値、脅威の深刻性、保護体制、保全実現可能性等を基準として、優先的に保全へ取り組む地域の選定を MWF と協働で行った。

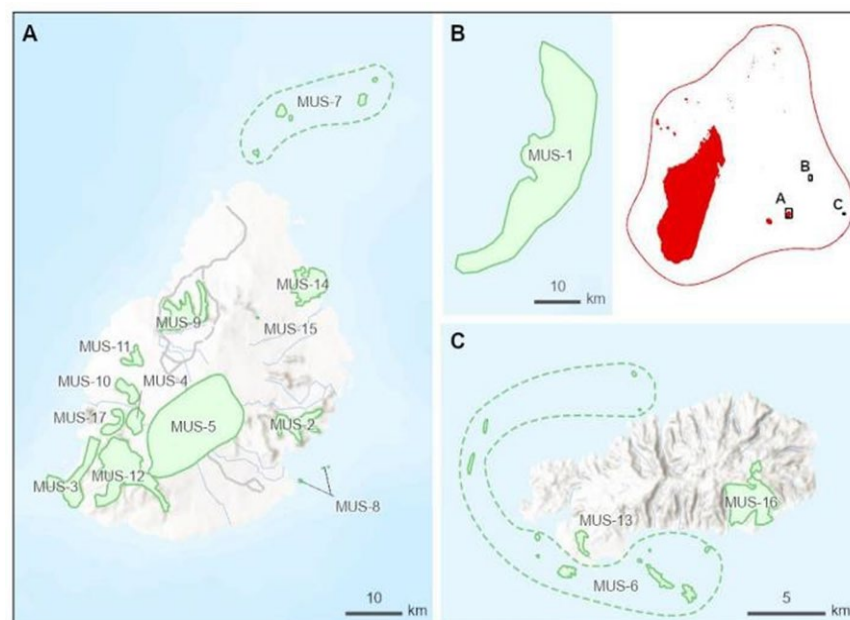


図 5.モーリシャス共和国の KBA

2.3.1.2 方法論

KBA の優先順位付けは、モーリシャス本島および周辺地域を対象としてデスクトップ分析により実施した。地理的に隣接し、生態系や保全対象種が重複する KBA については、生態学的な連続性を考慮し、一体的な保全単位として統合評価を行った。

優先地域の選定にあたっては、①固有種・絶滅危惧種を含む生物多様性の重要性、②外来種侵入や開発圧など脅威の深刻性、③法的保護や管理体制の状況、④保全施策の実現可能性や波及効果を総合的に評価した。これにより、保全上の緊急性と効果が高い地域を抽出した。

2.3.1.3 分析結果

優先的に保全へ取り組む地域として、以下の 6 地域を抽出した。これらの地域は、固有種や絶滅危惧種の生息地として重要である一方、外来種侵入、開発圧、生息地劣化等の脅威に直面しており、優先的な保全介入が必要と判断された。以下に、その対象地域と選択理由を示す。

① ブラックリバー渓谷国立公園および周辺森林 (MUS-12)

(ブラックリバー渓谷国立公園+マカベ・ブリーズ・フェール森林)

本地域は、モーリシャス最大の連続森林生態系を形成し、150 種以上の固有植物と、現存するすべての固有鳥類の重要な生息地となっている。国立公園として保護されている一方、

外来種侵入や生態系劣化の脅威が続いており、長期的な保全管理の強化が必要である。モーリシャスの生物多様性保全における最重要地域の一つと位置づけられる。

② モーリシャス北部小島群 (MUS-7)

(ラウンド島、サーペント島、ガンナーズクオイン島、フラット島、ガブリエル島など)

北部小島群は、世界的にも重要な固有種の避難地であり、特にラウンド島やサーペント島では、外来種の影響を比較的受けていない貴重な自然環境が維持されている。一方、一部地域では外来種侵入や過去の人為的攪乱による生態系劣化が進行している。島嶼生態系特有の脆弱性を有することから、継続的かつ重点的な保全対策が必要とされる。

③ バンブー山脈・東海岸山脈 (MUS-2)

本地域は、モーリシャスで 2 番目に大きな連続森林を有し、モーリシャスチョウゲンボウをはじめとする固有鳥類や絶滅危惧植物の重要な生息地となっている。一方、私有地が多く、開発計画やインフラ整備、外来種侵入による脅威が急速に拡大している。生物多様性価値が極めて高く、早急な保全介入が必要な優先地域と位置づけられる。

④ イエメン-タカマカ地域 (MUS-17)

本地域は、マスカリン諸島における沿岸乾燥林の貴重な残存地であり、モーリシャスチョウゲンボウや希少植物種の重要な生息地となっている。一方、私有地で法的保護が限定的であり、鹿の放牧、住宅開発、外来植物侵入などの影響が顕著である。生態系の希少性と保全体制の脆弱性を併せ持つ地域として、優先的な保全対策が必要とされる。

⑤ タマリンド滝・モンドラン地域 (MUS-4)

本地域は、複数の KBA が近接・重複しており、生態学的に一体的な管理が求められる地域である。世界的に重要な絶滅危惧植物を有する一方、保全活動は限定的で、外来種侵入や開発圧の影響を受けやすい状況にある。比較的小規模な介入でも高い保全効果が期待されるため、優先的な対応が必要とされる。

⑥ シャマレルール・モーン地域 (MUS-3)

本地域は、ユネスコ世界遺産であるル・モーン山を含み、モーリシャス固有鳥類や国花の唯一の野生個体群の重要な生息地となっている。既存の保全活動が進められている一方、高級住宅開発や外来種の影響が継続している。自然保全と文化・観光価値の両立を図る上で、戦略的に重要な地域と位置づけられる。

2.3.2 モーリシャスの生物多様性に関するデータ収集と専門家との意見交換

生物多様性保全提言の策定にあたり、既存の科学的知見および政策関連資料の体系的な整理を行った。具体的には、KBA 評価資料、IUCN レッドリスト、生物多様性関連戦略・行動計画等を収集・精査し、モーリシャスにおける生物多様性の現状、主要な脅威要因、保全上の課題を整理した。これらの分析結果を基に、専門家との意見交換を実施し、科学的根拠と現場の実情の両面を踏まえた提言内容の精緻化を図るとともに、実現可能性と政策的有効性を重視した保全提言の基盤を構築した。

3. 2026 年度の活動予定

3.1 モニタリングの継続と調査結果の評価

2026 年度も継続して、シギ・チドリ類などの水鳥のモニタリングを実施する。その上で、これまでの調査結果から、油汚染が水鳥に及ぼした影響の有無について専門家とともに評価を実施する。

3.2 普及啓発

2024 年度に開始した一般市民を対象としたバードウォッチングを、2026 年度も引き続き開催する。市民科学に基づく普及啓発活動を総括し、その成果を今後の環境保全に定着させることを目的として、参加者や関係者へのヒアリングを実施する。ヒアリングを通じて、活動への参加が理解や意識、行動に与えた変化を整理し、効果的であった取組や課題を明確化する。

3.3 モーリシャスの生物多様性保全の提言

2026 年度は、2025 年度までに実施した KBA 優先順位付けの結果および既存の生物多様性関連データの分析結果を基に、モーリシャスにおける生物多様性保全のための提言を取りまとめる。提言では、特定した保全優先地域ごとに、生態学的価値、主要な脅威要因、保全上の課題を整理した上で、必要とされる保全措置および管理強化の方向性を明確に示す。また、提言の社会的受容性を高める観点から、生物多様性保全の重要性を地域社会に伝え、主体的な関与を促進するための普及・啓発の視点も盛り込む。

提言の信頼性と実効性を高めるため、バードライフ英国本部のサイエンティストや MWF との協議を重ね、科学的妥当性、現場適合性、優先順位の妥当性について検証を行う。これにより、机上の分析にとどまらず、現実的な保全行動につながる提言の構築を目指す。